

# 明星大学図書館所蔵『平家物語』絵本の挿絵について

附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面対照表

山本 陽子

## 序 明星大学図書館所蔵『平家物語』絵本について

明星大学図書館には江戸時代の『平家物語』絵本が所蔵されている。完本ではなく『平家物語』十二巻のうち巻一と巻十一・灌頂巻を欠く十帖であるが、当初からの書名入りの蒔絵箱に収められた現存分（カラーフィルム『平家物語』全図）は、極めて保存がよく、脱漏や汚損もない<sup>1</sup>。一百図を越える挿絵が含まれていることは、購買時の記録からも知られていたが、冊子体ゆえに各図を見比べることは難しく、綴糸の傷んでいる帖もあるため、非公開の状態が続いてきた。

そこで詞書を含む全画面の撮影とweb上で全写真図版の公開が志された。当初、明星大学日野校貴重書デジタル保存プロジェクトの一部として第四巻まで撮影した時点で中断されていたが、平成十九年度より新たに「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」（平成十九年度科学研究費補助金・基盤研究（C）19520114）の一環として、撮影が再開されたものである。現在、『平家物語』絵本を含む明星大学が所蔵する江戸時代前期の奈良絵本・絵巻類の、図版写真の公開と書誌・釈文・解説、図版解説、武士の絵画表現の考察を併せたデータベースが構築されつつあり、その一部はイン

ターネットでの閲覧が可能となつた<sup>2</sup>。

全図の写真図版が公開された時点で、個々の挿絵のみを取り出し並べて比較すること、また他の『平家物語』絵の図版と比較することが容易になった。そこで作成を試みたのが、文末に【『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面対照表】として掲載した、他の『平家物語』絵巻・絵本との挿絵場面選択の比較表である。本論ではこの表を併用して他本の挿絵と明星大学本挿絵とを比較し、その特徴を考察したい。

## 一 『平家物語』の絵画化と作風

『平家物語』の絵画化はいつからか。作中人物が登場する作品であれば鎌倉時代に始まり、平清盛が活躍する「平治物語絵巻」が作られ、現存している。一方では小督と高倉天皇と隆房の恋物語を描いた「隆房卿艶詞絵巻」や、重盛や維盛、重衡ら平家の若者たちの華やかな宮廷での出来事を描いた「平家公達絵巻」のような白描の絵巻も現存している<sup>3</sup>。軍記絵巻として、集団行動する源平軍や、鎧兜に身を包んだ個々の武者が勇ましく表された<sup>4</sup>前者と、平安王朝の恋物語としての側面である後者とでは、顔貌の描き方から場面設定まで、全く異質な絵画表現となつている。

『平家物語』挿絵の確実な文献上の初出は<sup>5</sup>、永享十年（一四三八）『看聞御記』の、後崇光院が内裏より借覧し詞書を源中納言らに読ませた「平家絵十巻」で<sup>6</sup>、引き続いて南都喜多院の「平家八嶋絵」三巻や、内裏の「平家物語」四十帖、「平家絵扇流屏風」等、相次いで小画面連作の「平家物語」絵と思しき記事がある<sup>7</sup>。ただしこれらが如何なる作風であったかは判らない。現存最古の「平家物語絵巻」は十六世紀の土佐光信工房作とされる、静嘉堂文庫美術館・個人・京都国立博物館に部分的に分蔵される白描「平家物語絵巻」である<sup>8</sup>。画面を

見る限りでは、武者は軍記絵巻特有の表情とは異なるが、恋物語の絵巻ほど耽美的ではない。

注目すべきは『平家物語』から派生した素朴な物語の絵本・絵巻類が作られ始めていることと、「横笛草子」のような恋愛と発心を主題としたもの、「義経東下り」「じぞり弁慶」のような武者を主人公としたものと、分野は双方にわたる。

一方、『平家物語』中の特定の画題を抜き出した屏風絵で、構図の近似し定型化した作例が、桃山時代から江戸時代にかけて多く見られる（註7参照）。「一の谷合戦図」「宇治川先陣争図」「平敦盛・熊谷直実図」「那須与一」など個々の場面を取り上げたもの、「一の谷・屋島合戦図」のように大画面に多くの名場面をちりばめたものなど武者絵的な合戦屏風の一方、「大原御幸図」のような叙情的な主題と描写のものもある。近世の絵入り『平家物語』で注目されるのは、大名家旧蔵本が多いことである。福井藩主松平家に伝來した林原美術館本の考察では、「時慶卿記」寛永九年条の「平家物語絵詞」が東福門院和子の出産の翌日から読み聞かせられた記事から、「かような事情を背景として、江戸初期から中期にかけて、将軍家や大大名が、浩瀚な『平家物語』の絵巻づくりを企画したとしても不思議ではない」とされる（註6参照）。また真田宝物館本は真田家の、熊本大学北岡文庫本も細川家の所蔵であったといい、出口久徳により大名家の嫁入り道具として製作された可能性が示唆されていること（註5参照）は、明星本の成立を考える上で興味深い。

## 二 【平家物語】絵本・絵巻諸本の場面対照表について

【平家物語】絵本・絵巻諸本の場面対照表には、明星本と比較的時代が近いと思われる江戸時代前期の『平家物語』絵巻・絵本のうち、

完本で全図版が公開されている作例として、林原美術館本と真田宝物館本を選んだ。林原美術館本の図版と場面解釈には、小松茂美編の中央公論社版<sup>10</sup>を、真田宝物館本では、郷土研究誌『長野』に連載された小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」<sup>11</sup>の図版写真と解説を参考とした。

これらと同じく先立つ時代の版本として、上方で刊行された明暦二年（一六五六）版の挿絵を加えた。『平家物語』最初の絵入り版本であり、出口久徳によって以後の絵入り版本に影響を与えたこと、チエスター・ビーティー図書館本や真田宝物館本などの挿絵入り写本への影響が指摘されるものである。明暦二年版本の図版は福井市立図書館松平文庫本<sup>12</sup>を用い、書誌以下は出口の「明暦二年版『平家物語』」の挿絵をめぐって<sup>13</sup>「絵入り版本『平家物語』考—挿絵の中の義経・弁慶の物語について」<sup>14</sup>を参考とした。

各本の場面選択以外で注目したのは、一画面中に「異時同図」のような複数の時制、あるいは霞や山で区切られた複数の時間や場所が描かれているか否かであり、複数の場合はその総場面数を洋数字で付加した。また、明星本の絵は総て見開きの二頁に亘るが、真田本は見開きと半丁分（片頁）のものとがあり、明暦二年本は、中央で折られた一丁分の表裏が一続きの絵のものと、別場面の二圖（片頁ずつ二圖）のものとがあるので、片頁のものに\*印を付けた。

さらに錯簡の有無も記した。林原本卷十二に錯簡があることは、すでに小松が指摘している（註6参照）。今回用いた明暦二年版本の松平文庫本にも卷一・三・七・十・十一・十二に、錯簡と思しきものがあり、該当箇所を捜すこととなつた。卷十一の「遠矢」の船戦の箇所で陸上で弓を射合う両群は、錯簡か絵師の間違いか不明だが、これ以外の該当箇所はカッコ内に正当と思われる章名と丸括いの洋数字で示した。

この【表】でまず目に付くのは、林原本の七〇五画面、他本の約三倍という、画面数の圧倒的な多さである。平家物語十二巻の各巻をさらに三巻ずつに分けた構成であるためか、場面選択の偏りはほとんどない。さらにその約半数が一画面に複数の場面を霞等で区切って描くので、総画面数は膨大となる。

しかしその林原本でも、総ての場面を網羅してはいない。例えば巻六「紅葉」で、高倉天皇の愛した紅葉の葉を焚火にして酒を飲んでしまう下部たちの場面は、図柄も美しいので明星本や明暦二年本で取り上げられているが、林原本にはない。他の三本の画面数は、明暦本の一八四丁から<sup>15</sup>真田本の二五三面まで<sup>16</sup>比較的近いが、敦盛最期や那須与一のような名場面以外では選択場面に相違があり、明暦本と図様の近似が指摘される真田本（註13参照）ですら、例えば巻一の挿絵のうち同一内容が選択された例は約半数にすぎない。

さらに、真田本にある巻一「清水炎上」の高倉天皇の即位式や、明星本巻九「一二之懸」の一番乗りを名乗り挙げる熊谷父子、明暦本巻十「滝口入道」に帰依する人々など、それぞれに他の三本にない場面がある。選ばれた箇所が完全には一致しないことから、これら各本の場面選択が、相互間の全面的な模倣や引用ではないことがわかる。

**三 明星大学図書館本の特色**

明星大学本の挿絵は一二三面、すべて見開きの形で冊子体の本文に貼り込まれ、錯簡はない。絵具は上質で、褪色は見られない。桃色や水色などの中間色を交え、水波や土坡の絵具をぼかす。戦闘場面でも人数は比較的少なく、背景はあつさりと余白を多く取つて描くので、全体的には淡白な印象である。しかし法皇や宮中の女房達の着衣には細い金泥の線で衣文線や文様が描かれ、武者の鎧兜の金具にも金泥が

用いられる。刀や薙刀などの刃物に銀は使われず、灰青の絵具に青が塗り重ねられる。黒い直衣に織り出された立涌などの有職文様や烏帽子、鎧の黒金具には、膠分の濃い艶のある墨が上から塗られ、襖絵や出産の白絵屏風には光沢を持つ雲母が刷かれるなど、光線の加減でしか見えない箇所まで筆が重ねられている。

絵の上下には総て、柔らかな輪郭線の霞が棚引く。霞は淡灰色の上に金沙子が極めて濃く蒔かれる。地面にも部分的に金沙子が刷かれ、余白の多い空間の調子が整えられている。詞書の料紙にも、下絵として金泥で霞の間に小さ目の草花や水草、風景等が繊細に描かれ、各冊の表紙見返しは一面が金地で格子状の型押しがある。上質の素材と金の多用、細やかで手の込んだ仕事、ほとんど開かれたことのないような保存の良さ、傷みのない専用の蒔絵箱などからは、林原本や真田本と同様に、大名家の嫁入り道具のような制作事情が想像される。

描写はきわめて丁寧で、直衣や女房装束、鎧兜、特に馬の形状は手馴れている。敦盛の萌黄や直実の赤皮緘など、鎧の配色も本文にかなり忠実である。義経の「赤地錦の直垂に紫裾濃の鎧」を再現するため直垂にはそれらしき模様を加え、鎧には色の出にくい紫をあえて用い、弁慶の直垂には仏教色の強い輪宝模様を描く。南都牒状などの僧侶たちの集団には、墨染よりも濃淡の柿色に金沙子で模様を入れた衣の者を多く描くので、寺中であつても華やかな色彩となる。

卷三「御産巻」の中宮の産室（カラー図版『平家物語』巻三「御産巻」部分）では、本文に記述がない白絵の屏風や侍女たちまでも白一色で描えた装束などを、有職故実に従つて白・銀・雲母を駆使して描く。建築物は丁寧な屋台引きの細線で描かれ、板や柱ごとにぼかしが入れられて立体感が出される。もっとも襖絵には水墨画が描かれ、床には畳が敷き詰められた当世風の数奇屋風書院造に描かれるところは、林原

本や真田本と同様である。風景は大和絵の穏やかな土坡と松が多用されるが、俱利伽羅谷や一の谷のような山崖は迫力がない。厳島神社や富士山は比較的実景に近いものの、高野山や那智滝などは全くかけ離れて類型的に描かれる。

男女の貴族の顔貌は、白塗りのやや長めの顔に、点状の瞳に極細の上瞼の線を添えた目に鈎鼻と、赤い小さな点の口を描き、頬には淡朱をぼかす。武者は白塗りと肌色の顔の者が混在し、瞳を挟んで上下の瞼の線を細く入れる。鼻はし字状の鈎鼻、口は赤い小点で、小さな口髭か薄墨で口の回りをぼかす場合もあるが、貴族の顔立ちと大差ない。真田本では顔色を灰色にするなど他本では際立つて恐ろしげに表される弁慶ですら明るい肌色でおちよば口の童顔(カラー図版『平家物語』卷十一「壇浦合戦」部分)である。兜の中の顔も丸い輪郭線で括られ、真横顔はきわめて少ない<sup>17</sup>。林原本など合戦絵巻の武者の顔に見られるような、兜の目庇ぎりぎりに見開いた目と大振りな鼻と厚い唇や、への字口、頬骨の出たごつごつした輪郭線の武者らしい顔貌表現(註4参照)は行われない。水夫達など庶民も、体は手首足首が多少くびれた筋肉質であるが、顔立ちは卑しくなく、さほど貴人との差は見られない。

複数の時点を一図に描くことは珍しく、一画面に同一人物を複数回描く例は卷二「少将乞請」(カラー図版『平家物語』卷二「少将乞請」)の、教盛邸で使者を命じられる季貞と清盛邸で口上を言う季貞の一箇所のみである。また一人の人物の周囲に異なる時制の出来事を描く例は、卷四「鶴」(カラー図版『平家物語』卷四「鶴」)で怪しい黒雲が御殿の上に棚引いた時点と、頭は猿、胴は狸、尾は蛇で鳴声が鶴に似た怪物が仕留められる二時点と、卷五「文覚被流」で文覚を中心に、まず資行が鳥帽子を打落とされた事、刀を抜いた文覚に武者所の右宗

が対向する所、その後ようやく寄つて来た人々の三時点を描く、二箇所である。

場面選択では、一の谷と屋島の合戦を含む卷九が三九図と他の約二倍あり、「一二之懸」が多く描かれている以外は、ほぼ均等である。「足摺」(カラー図版『平家物語』卷二「足摺」)の俊寛が、尻餅をつく他本と違つてうつ伏せに描かれるのは、本文の「渚にあかりたをれふし」の忠実な絵画化であろう。しかし他の名場面、「橋合戦」の淨妙坊や「坂落」「敦盛最期」(カラー図版『平家物語』卷九「敦盛最期」)、「那須与一」等は、屏風絵や他本の構図と近似した定型化された図様である。また異国絵が少ないことも指摘できる。『平家物語』に含まれる挿話のうち「頼豪」「名虎」など日本の場面はあるが、他本に見える「蘇武」など中国の故事、「慈心房」の閻魔王宮の挿絵はない。ただし唯一描かれる卷五「咸陽宮」(カラー図版『平家物語』卷五「咸陽宮」)の秦始皇帝宮の異国表現は、服装、建築、文様、庭の岩組に至るまで手馴れたもので、同時代の他の作例に劣らないだけに、なぜ描かなかつたか理解に苦しむ。

【場面比較表】で特記すべきは、明星本で死や残酷な場面が回避されていることである。例えば卷九「小宰相」では他三本が入水した小宰相の死体を描くのに対し、明星本は入水直前の合掌する姿しかない。『平家物語』の頂点とも言うべき卷十一「先帝御入水」の、二位の尼が安徳天皇と入水しようとする場面も他の三本にあるが明星本にはなく、入水しても引上げられて生き残る建礼門院と泳ぐ宗盛父子の場面(カラー図版『平家物語』卷十一「先帝御入水」)のみを描く。

その宗盛父子の斬首の場面も卷十一「大臣殿誅罰」の他の三本には見えるが、明星本にはない。もつとも黒髪に染めた実盛の首や、斬首の場で乳母と引き離される副将など、全く描かれないわけではない。

それでも極力、血や討たれた死体よりは生前の場面が選ばれ、林原本のように切り離された首やその断面、流れ出た血までを執拗に描くことはしない。

このような残酷場面を回避する傾向や、弁慶のような荒武者すら顔貌を恐ろしげに描かない明星本ゆえ、合戦場面は林原本等他の挿絵に比べて迫力を欠く。すまし顔で刀を振り上げたのみで斬られもせず血の流れない画面(カラー図版『平家物語』卷四「橋合戦」)は、人形の戦争のようにしか見えない。軍記としての『平家物語』の挿絵としては、他本に劣る重大な欠陥と言わざるを得ない。

しかし『平家物語』はまた、平氏という貴族の物語でもあり、古くは「平家公達絵巻」や、後には「横笛草子」・「妓王」のような御伽草子絵を派生し、「大原御幸」屏風のような、恋や発心にまつわる絵画の主題ともされてきた。明星本の挿絵は、この優雅な『平家物語』の系統に位置づけ得る。軍記物語としては冗漫な箇所となりがちな卷五「月見」の徳大寺実定が旧都の大宮御所を訪れる場面(カラー図版『平家物語』卷五「月見」)や、卷六「小督」の段など王朝風の場面は極めて納まりがよい。さらに雅な心を持ちつつも戦場に赴かねばならない鎧姿の平家の公達、例えば卷七「竹生島詣」の弁財天の社前で琵琶を弾く経正や、「忠度部落」の俊成に和歌を差し出す忠度(カラー図版『平家物語』卷七「忠度部落」)などには、華麗な甲冑の描写も巧みなこの絵師ならではの情緒が漂う。

結 『平家物語』挿絵の源泉

本論では明星大学図書館所蔵『平家物語』の挿絵を、同じく江戸時代の林原本・明暦版本・真田本『平家物語』挿絵の場面選択表と比較しつつ考察した。その結果として他本との絵画表現の差異—軍記絵巻

までの傾向が強い林原本、合戦屏風からの引用も含む明暦本、明暦本と近似する図様も含むが必ずしも一致はしない真田本に対し、合戦絵というよりも宮廷文化的な表現傾向を持つという明星本の特徴を見た。これらの相違は何に基づくのであろうか。

軍記物語性と王朝的な耽美性のような、『平家物語』自体の持つ複数の側面に由来することは先章で論じた。しかし『平家物語』以外にも、そこから派生した様々な物語や絵画、演劇の影響がある。出口は明暦本の義経主従の扱いについて、『平家物語』本文に書かれる以上に義経の登場場面が多く、『平家物語』では七箇所に名が載る程度<sup>18</sup>に過ぎない弁慶が、三草勢揃以降は必ず義経の側に描かれることを指摘する(註14参照)。実際、明暦本には弁慶の登場する図が十六箇所あり、同様のことが他の三本にも云える。明星本でも卷九「老馬」から卷十一「壇浦合戦」までの十二箇所で、義経の側に七つ道具を背負った弁慶が描かれている。これは版本か写本かを問わず、近世の『平家物語』挿絵全体に共通する特徴である<sup>19</sup>。

その七つ道具が義経主従の出典を推測させる。弁慶は場面によつて袈裟頭巾・鉢巻・揉烏帽子・兜と様々な姿であるが、七つ道具は他の僧兵から弁慶を際立たせる目印として、どの本の挿絵にも描かれる。しかし『平家物語』自体には七つ道具の記述はない。『平家物語』から派生した、義経や弁慶を主人公とする様々な幸若舞曲や御伽草子等によつて、絵師と観者が共有する常識となつていたゆえに<sup>20</sup>、七つ道具が挿絵に描かれたのである。

また諸版本について出口は、卷十一前半部で平家に比べ義経軍の場面が多く絵画化されていると指摘する(註14参照)。語呂合わせに過ぎない「勝浦合戦」や使者を縛る「大坂越」のような、挿絵にするほど価値のない源氏の場面がある反面、この間の平家はほとんど描かれ

ないという。明星本以下の写本挿絵も、対照表で見てみると同様に「勝

一部である。

浦合戦」や「大坂越」を含み、平家側はない。しかしこれは単なる源氏好み、判官贔屓のためとは限らなかろう。

逆に、平家側ばかりが選択されている箇所もある。例えば卷七「忠度都落」「經正都落」、卷十の「千手」「横笛」等は、『平家物語』の大筋に無関係な出来事であるが、明暦本や明星本をはじめとの本の挿絵でも、これらの場面が選択されている。忠度と經正、千手が選ばれたのは、謡曲や幸若舞の「忠度」や「經正」「千手」などに、横笛は「滝口入道縁起」や「横笛草子」などの御伽草子によつて親しまれていたためである(う)ことは、義経主従の場面が多いことと同様に考えられる。

これら『平家物語』諸本挿絵の場面選択や、個々の場面の構図の多様さは、中世の数々の『平家物語』絵巻や合戦屏風、絵本類を受け継いだのみならず、この物語から派生した幸若舞曲・謡曲・御伽草子などの文学や演劇作品の流行が反映された結果である。その背後に広がる中世文化の多彩さには、圧倒されるばかりである。

本論は、『明星大学研究紀要』「日本文化学部・言語文化学科紀要」第十七号（平成二一年）掲載予定の論文『平家物語』絵本・絵巻の挿絵について—明星大学図書館所蔵本を中心に—附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表」を抜粋、改訂したものであり、林原本・明暦版本・真田本に関する、対照表で比較した上での見解は、右論文を参考されたい。

本論は、平成十九年度科学研究費補助金・基盤研究(C)19520114「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」（代表研究者）および明星大学平成二十年度特別研究費（共同研究助成費）「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」（研究分担者）の成果の

#### [註]

<sup>1</sup> 書誌については、本報告書の、柴田雅生「明星大学所蔵絵本・絵巻——解題とその言語的特徴——（仮題）」・本データベース 柴田雅生分担「明星大学所蔵『平家物語』絵本について」を参照されたい。

<sup>2</sup> <http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/> 参照

<sup>3</sup> 山本陽子「小画面説話画における武者の顔貌表現について」『明星大学研究紀要』「造形芸術学部・造形芸術学科」第十七号 平成二年（掲載予定）  
<sup>4</sup> 武田恒夫・尾崎元春・前田訣子「源平の美術（絵画）」『別冊太陽』十三「平家物語絵巻」昭和五〇年

<sup>5</sup> 鎌倉末ころの『入木口伝抄』には、比叡山で制作された「平家物語絵巻」が存在していると解しうる記事があるという。（出口良徳「平家物語絵をめぐって」『平家物語を知る事典』東京堂出版 平成十七年）  
<sup>6</sup> 小松茂美「林原美術館本『平家物語絵巻』のすべて」『平家物語絵巻』卷第十一 一〇六～二四三頁 中央公論社 平成四年  
<sup>7</sup> 相澤正彦「平家物語と絵画」『平家物語の世界展』図録 平成五年  
<sup>8</sup> 玉蟲敏子「作品解説三八」『室町の絵画展—詩画軸・屏風・障壁画』静嘉堂文庫美術館 平成八年  
<sup>9</sup> 酒巻智子「源平の美学—『平家物語』の時代」『源平の美学—『平家物語』の時代』一〇九～一二二頁 サントリー美術館 平成十四年  
<sup>10</sup> 小松茂美編「平家物語絵巻」卷第一～十一 中央公論社 平成一年～四年

<sup>1</sup> 小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」一～一七 『長野』一九三～一九〇号 平成九年～平成十三年  
<sup>2</sup> 国文学研究資料館のマイクロ資料による  
<sup>3</sup> 出口久徳「明暦二年版『平家物語』の挿絵をめぐって」『立教大学日本文学』八一号 十

<sup>1</sup><sub>4</sub> 四〇二八頁 平成十年

<sup>1</sup><sub>4</sub> 出口久徳「絵入り版本『平家物語』考—挿絵の中の義経・弁慶の物語について—」『学芸国語国文学』二九号

<sup>1</sup><sub>5</sub> 一〇十六頁 平成九年

<sup>1</sup><sub>6</sub> 明星本の挿絵画面は現状で二三三面であるが、卷一と卷十二を欠くため、総場面数は不明である。

<sup>1</sup><sub>7</sub> 例えば林原本「弓流」では全六一名中、いわゆる七・三の角度の斜前向きが二一名、後向きが十四名、真横向きが二六名と、真横向きは斜向きと同数かそれ以上に多いのに対し、明星本「弓流」では全十五名中、斜前向きが十一名、後向きが三名で、真横向きは一名と少ない（註4参照）。

<sup>1</sup><sub>8</sub> 藤原成一「影薄い弁慶—『平家物語』の世界—」『弁慶』九〇十五頁 法藏館 平成十四年、参照

<sup>1</sup><sub>9</sub> 卷九「三草勢揃」から卷十一「判官都落」までの間で、林原本では二八箇所、真田本でも判別できるもののみで十三箇所、義経の傍らに弁慶が描かれている。

<sup>2</sup><sub>0</sub> 七つ道具は室町末期には絵画にも描かれ「比較的はやくからの常套手段であった。」といふ。（徳田和夫「弁慶」項目解説『歴史学辞典』三　かたちとしるし』弘文堂 平成七年）

## 『平家物語』絵本・絵巻の場面対照表

内容末尾の洋数字は一段中にある異時同図の場面数 \*は片頁のみ ○囲いの数字は錯簡の本来の章の林原本での段数

卷一 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本(巻一なし)
祇園精舎				
殿上闇討	節会に参内した忠盛と庭の家貞4 鳥羽上皇に釈明する忠盛 2	節会に参内した忠盛と庭の家貞	節会に参内した忠盛と庭の家貞 鳥羽上皇に釈明する忠盛 *	
鱸	仙洞御所で歌を詠む忠盛 扇を見つけて歌を詠む女房			
熊野詣の船で鱸の吉兆を得る清盛	熊野詣の船で鱸の吉兆を得る	熊野詣の船で鱸の吉兆を得る		
禿童	出家する清盛		清盛の前の禿童たち *	
	市中を見回る六波羅の禿童			
我身栄華	清盛邸のにぎわい(長大画面) 妓王邸で銭を受け取る刀自	清盛邸のにぎわい	清盛邸のにぎわい	
妓王	仏御前を追い返す清盛 2 清盛に懇願する妓王 2			
	仏御前の舞を見る清盛と妓王2 妓王に闇を出す清盛 2		仏御前の舞を見る清盛と妓王	
	清盛邸を出る妓王 2 悲嘆に沈む妓王一家			
	人々から文を受ける妓王 2 清盛から呼出を受ける妓王 3			
	仏御前の前で舞う妓王 2	仏御前の前で舞う妓王	仏御前の前で舞う妓王 *	
	泣き沈む妓王一家			
	嵯峨の庵の尼姿の妓王一家			
	妓王の庵を訪れる尼姿の仏御前		妓王の庵を訪れる尼姿の仏御前 *	
	ともに念仏する妓王一家と仏御前	若者一行と牛車(殿下乗合②か)		
二代后	二条天皇の艶書を受取る大宮 入内の宣旨を下す二条天皇 2			
	大宮を説得する父の右大臣 2			
	泣く泣く車に乗る大宮	泣く泣く車に乗る大宮		
	麗景殿の二条天皇と大宮		二条天皇に入内した大宮 *	
額打論	二条天皇の発病と崩御の宮中 2 廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧	三人の尼と一人の尼(妓王⑪か) 廟所で延暦寺の額を壊す興福寺僧		
清水炎上	比叡山を駆け下る延暦寺の僧兵達 噂を聞いて内裏に集まる平家勢			
	清盛邸へ避難する後白河法皇 3 延暦寺僧に焼討ちされる清水寺2			
	後白河上皇の還御 2 上皇に本音を漏らす西光		延暦寺僧に焼討ちされる清水寺 *	
				高倉天皇の即位式
	新帝高倉天皇の御所			
殿下乗合	鷹狩に興じる資盛			
	資盛主従を懲らしめる基房の下部		資盛主従を懲らしめる基房の下部	
	資盛の訴えに怒る清盛 2			
	基房一行を辱める資盛の下部たち		基房一行を辱める資盛の下部たち	
	屈辱を嘆く基房			
	資盛を叱責する重盛			
鹿谷	高倉天皇の朝観行幸 2 山鳩の変事を報告する検校 3			
	成親が上賀茂社の夢告を受ける2 上賀茂社の神木への落雷		成親が上賀茂社の夢告を受ける *	
	鹿谷の宴会で瓶子を倒す成親 2	鹿谷の宴会	鹿谷の宴会で瓶子を倒す成親 *	
鵜川合戦	多田行綱を呼び寄せた成親 加賀国目代と湧泉寺僧侶との乱闘			
	湧泉寺を焼く官人たち			
	目代の館を攻める白山の神人衆徒			
	白山の神人達が比叡山に訴える		白山の神人達が比叡山に訴える *	
	朝廷に訴える比叡山の大衆たち			
願立	比叡山勢に矢を射かける頼春勢 比叡山の僧たちを追い返す武士達			
	閑白を呪う比叡山の僧侶達			
	閑白邸突き立つ櫻の枝			
	閑白の病気平癒祈願の牛車 *		閑白の病気平癒祈願に行く母 *	
	閑白家に託宣を示す少女 病の平癒した閑白師通			
			再び病に付す閑白師通 *	
	閑白の死を嘆く女房達	死んだ閑白と嘆く女房達 *		
御輿振	比叡山の神輿と頼政軍		比叡山の神輿と頼政軍	
	比叡山勢に矢を射かける重盛勢	比叡山勢に矢を射かける重盛勢	比叡山勢に矢を射かける重盛勢 *	
内裏炎上	院御所の公卿詮議 祇園社に仮置される比叡山の神輿			
	比叡山勢入京の噂に移動する天皇			
	比叡山への使者を務める平時忠 2	比叡山への使者を務める平時忠	比叡山への使者を務める平時忠 *	
	大内裏の炎上	大内裏の炎上		

巻二 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
座主流		公卿達と座主明雲 *	公卿達と座主明雲 *	明雲の罪を議す公卿達
明雲の罪を議す公卿達2				
明雲と追い立ての武士達				
西光父子を呪詛する大衆				
流される途中の明雲 2	流される途中の明雲 *	流される途中の明雲 *	流される途中の明雲	流される途中の明雲
比叡山の衆徒が詮議 2	比叡山の衆徒が詮議 *	比叡山の衆徒が詮議 *	比叡山の衆徒が詮議	比叡山の衆徒が詮議
明雲奪還に向う大衆				
比叡山に戻った明雲3	比叡山に戻る奥の明雲 *	比叡山に戻った明雲 *	明雲に奥を勧める祐慶	明雲に奥を勧める祐慶
一行阿闍梨	九曜の形を見る一行阿闍梨		九曜の形を見る一行阿闍梨 *	
西光被斬	法皇に奏上する西光			
	清盛に密告する行綱2		清盛に密告する行綱 *	
	資成の復命を聞く清盛			
	清盛邸で捕まる成親2	清盛邸で捕まる成親	清盛邸で捕まる成親	清盛邸で捕まる成親
小教訓	西光が清盛に言い返す4		西光が清盛に言い返す *	西光が清盛に言い返す
	引き据えられる成親 2		引き据えられる成親	
	成親の命乞をする重盛4	成親の命乞をする重盛	成親の命乞をする重盛 *	成親の命乞をする重盛
少将乞請	嘆く成親の家族 2			
	法皇に別れを告げる成経 3		法皇の側近に別れを告げる成経 *	
	教盛と対面する成経 2			
	教盛から清盛への使者となる季貞2	清盛と家臣(清盛に伝える季貞か)	教盛から清盛への使者となる季貞	季貞に使者を命じる教盛2
教訓	教盛の屋敷に戻る成経2		教盛の屋敷に戻る成経 *	
	法皇に抗し武装する清盛		法皇に抗し武装する清盛 *	
	重盛に諫められる清盛 4	清盛と武装した兵士たちと公卿	重盛に諫められる清盛	重盛に諫められる清盛
烽火	武士を自邸に集めさせる重盛4	重盛邸に集まる武士達 *	重盛邸に集まつた武士達 *	重盛邸に集まつた武士達
	重盛邸に集まつた武士達		重盛邸に集まつた武士達 *	
新大納言被流	流罪となる成親の車と船3	流罪となる成親の船 *	流罪となる成親の船 *	流罪となる成親の車
	備前児島に着いた成親2	備前児島に着いた成親 *	備前児島に着いた成親 *	
阿古屋之松	幼い息子に語りかける成経2	幼い息子に語りかける成経	幼い息子に語りかける成経	幼い息子に語りかける成経
	成親の配所を尋ねる成経		成親の配所を尋ねる成経 *	
新大納言死去	成親の北の方が文を書く			成親の北の方が文を書く
	北の方が文を信俊に託す			
	手紙を読む成親 2			成親から返事を預かる信俊
	返事を見て泣く北の方		返事を読む北の方 *	
	崖から突落とされた成親			
	出家する成親の北の方			
徳大寺厳島詣	実定に重兼が提案する	実定に重兼が提案する *	実定に重兼が提案する	
	厳島神社社殿と実定の船		厳島神社社殿と実定の船	
	清盛に会う厳島内侍達3			
	清盛と公卿たち(徳大寺左大将か)			
山門滅亡	四天王寺に詣でる法皇			
	比叡山の大衆と堂衆の戦	比叡山の大衆と堂衆の戦	比叡山の大衆と堂衆の戦	比叡山の大衆と堂衆の戦
	荒れてた比叡山			
善光寺炎上	炎上する善光寺	炎上する善光寺	炎上する善光寺 *	炎上する善光寺
康頼祝詞	鬼界島の成経と康頼3	鬼界島の成経と康頼	鬼界島の成経、康頼と俊寛 *	鬼界島の成経康頼
卒塔婆流	卒塔婆を流す康頼成経2			卒塔婆を流す康頼成経
	厳島で卒塔婆を拾う僧2			
	卒塔婆と留守家族 3	泣く留守家族か	卒塔婆と留守家族 *	卒塔婆と留守家族
蘇武	雁に手紙を託す蘇武	雁に手紙を託す蘇武		
	手紙を読む昭帝 2			
	蘇武と帰還する漢軍 3			
	昭帝の前の蘇武 3		昭帝の前の蘇武 *	

巻三 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
赦文	高倉天皇の朝覲行幸			
	彗星の出現			
	中宮の安産祈願 3	中宮の安産祈願 *	中宮の安産祈願	中宮の安産祈願
	赦免を勧める重盛 3			
		赦免状を書かせる清盛 *		赦免状を書かせる清盛
	赦免状を下す清盛 2		赦免状を下す清盛 *	赦免状を下す清盛
足摺		赦免の船と成経康頼俊寛 *		
	赦免状を読む俊寛			赦免状を読む俊寛
	成経の袂に縋り付く俊寛			
	渚で足摺りして泣く俊寛3	渚で足摺りして泣く俊寛 *	渚で足摺りして泣く俊寛 *	渚で足摺りして泣く俊寛
御産巻	鹿瀬庄の成経と康頼			
	産所の頼盛邸に来る人2			
	施物を献上する重盛			
	安産祈願の僧たちと清盛	出産の心配をする清盛 *		安産祈願の僧たちと清盛
	安産祈願の後白河法皇			
	中宮の出産 3	中宮の出産 *	中宮の出産	中宮の出産
公卿揃	法皇へ献上品を渡す平家	門前に集まる馬 *		
		清盛と公卿たち *	清盛に出産祝を言う公卿 *	
大塔建立	僧侶らに勧賞を行う天皇			
	高野山で告げる高僧 3	社殿前の老僧と一行		高野山で告げる高僧
	曼荼羅を描く清盛			
	嚴島で小長刀を賜る清盛		嚴島で小長刀を賜る清盛	嚴島で小長刀を賜る清盛
頼豪		天皇の前の僧侶 *		
	呪詛する頼豪	呪詛する頼豪 *	呪詛する頼豪 *	呪詛する頼豪
	皇子の病床に現れた僧 2			
	皇子誕生を祈る良真2			
少将都還	成親の筆跡を読む成経3			成親の筆跡を読む成経等
	成親供養の成経と康頼		成親供養の成経と康頼 *	
	父の別荘で泣く成経等2			
	家族と対面する成経4	家族と対面する成経 *	家族と対面する成経 *	家族と対面する成経
	双林寺に落ち着いた康頼 *			
有王島下	俊寛へ文を預かる有王2			
	俊寛と有王の再会 5	俊寛と有王の再会 *	俊寛と有王の再会 *	俊寛と有王の再会
	倒れ伏した俊寛 *			
	娘の手紙を読む俊寛2			
	俊寛を葬る有王 2			
	俊寛の死を報告する有王2		俊寛の死を報告する有王 *	
辻風	治承四年五月辻風の災 2		治承四年五月辻風の災 *	治承四年五月辻風の災
医師問答	熊野本宮に参る重盛 2		熊野本宮に参る重盛 *	
	重盛に名医を勧める使者		重盛に名医を勧める使者 *	重盛に名医を勧める使者
	使者の報告を聞く清盛			
	出家する重盛と泣く人々2			
無紋沙汰	夢の話を聞く重盛 2			
	無紋の刀を与える重盛2	無紋の刀を与える重盛 *	無紋の刀を与える重盛 *	無紋の刀を与える重盛
灯籠	重盛の行う念仏供養	重盛の行う念仏供養 *	重盛の行う念仏供養 *	重盛の行う念仏供養
金渡	重盛は妙典に寄進を託す			
	育王山へ寄進する妙典 2			
法印問答	地震を占う安部泰親 2	地震を占う安部泰親 *	地震を占う安部泰親 *	
	清盛と問答をする静憲2	清盛と問答をする静憲 *		清盛と問答をする静憲
大臣流罪			清盛の前に座る公卿たち *	
	出家する關白基房			
		配流される大臣の輿 *		配流される大臣の輿
		騎馬の一団 *		
	配所で琵琶を弾く師長 3			
		話す公卿と僧(金渡②の重盛か) *		
		病に臥す公卿(金渡②の重盛か) *		
行隆之沙汰	自邸で切腹する遠業2		自邸で切腹する遠業	
	清盛に呼ばれ嘆く行隆3	門前の迎えの車 *		清盛に呼ばれ悲しむ行隆
	行隆に清盛の贈物が届く	男を囲む女房達 *	行隆に清盛の贈物が届く*	
法皇御遷幸	御所を囲む平家の軍勢3			
	鳥羽殿に遷される法皇3			
	鳥羽殿を訪れる静憲3		鳥羽殿を訪れる静憲 *	鳥羽殿を訪れる静憲
	悲しみに沈む中宮			
城南之離宮		天皇に奏上する宗盛か *		
	天皇の文を見る法皇2	法皇の文を見る天皇 *		
	天皇に奏上する宗盛			
	離宮で冬を過ごす法皇		離宮で冬を過ごす法皇 *	離宮で冬を過ごす法皇

巻四 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
巣島御幸	離宮に幽閉される後白河法皇4 静まり返る高倉上皇邸2			
	巣島行幸に出立する高倉上皇 法皇に会うと宗盛に告げる上皇3	巣島行幸に出立する高倉上皇*		
				成範が法皇に上皇の到着を伝える
還御	高倉上皇と語らう後白河法皇 5 巣島社に到着した高倉上皇 4	高倉上皇と語らう後白河法皇 *	高倉上皇と語らう後白河法皇 *	
	帰途藤花を取らせる高倉上皇2	高倉上皇の船 *	巣島社に到着した高倉上皇	帰途藤花を取らせる高倉上皇
	平家に勧貢する高倉上皇 3			
	鳥羽の津に還御した高倉上皇			
	安徳天皇の即位式	安徳天皇の即位の御輿 *		
源氏揃	新帝即位の記録を見る三位殿 以仁王に源頼政が挙兵を勧める	以仁王に源頼政が挙兵を勧める *	以仁王に源頼政が挙兵を勧める *	以仁王に源頼政が挙兵を勧める
	東国へ下知する以仁王 3			
	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗 *	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗	熊野別当湛増が反乱鎮圧に失敗
鼬之沙汰	後白河法皇の館で騒ぐ鼬	後白河法皇の館で騒ぐ鼬 *	鼬の事を占う阿部泰親 *	後白河法皇の館で騒ぐ鼬
	占いの返事を読む法皇 3			
	法皇の還御を宗盛が清盛に嘆願2			
	謀反の知らせを受ける清盛 3			
信連合戦	女装して川を渡る以仁王 3			女装して川を渡る以仁王
	宮に笛を渡す信連 2			
	宮の館に残った信連	宮の館に押しかける平家勢 *		
	ただ一人立ち向かい奮戦する信連	ただ一人立ち向かい奮戦する信連 *	ただ一人立ち向かい奮戦する信連 *	ただ一人立ち向かい奮戦する信連
	生け捕りにされる信連 2			
高倉宮園城寺入御	宗盛の前に引き出された信連		宗盛の前に引き出された信連 *	宗盛の前に引き出された信連
競	法輪院に落ち着く以仁王 2			
	自邸を焼き三井寺に向う頼政 2			
	宗盛の名馬をせしめた競 4	宗盛に呼ばれた競 *		
	競に謀られたことを知る宗盛 2			
	頼政の下で馬に焼印するところ3	頼政の下で馬に焼印するところ *	頼政の下で馬に焼印するところ *	頼政の下で馬に焼印するところ
山門牒状	比叡山へ牒状を記す三井寺大衆2	文を書く僧侶達 *		比叡山へ牒状を記す三井寺大衆
南都牒状	比叡山の衆徒は牒状に怒る 2			比叡山は三井寺には加担しない
南都返牒		僧侶達と男 *	興福寺の返状を読む三井寺僧達 *	興福寺の大衆は助力を待てと返状
大衆揃	大衆揃	夜討を巡り眞海と慶秀の長詮議3	興福寺の返状を読む三井寺僧達 *	興福寺の大衆は助力を待てと返状
	松明を持って出陣する三井寺勢 4	松明を持って出陣する三井寺勢 *	夜討を巡り眞海と慶秀の長詮議	夜討を巡り眞海と慶秀の長詮議
橋合戦	三井寺を出る以仁王 2	三井寺を出る以仁王 *	松明を持って出陣する三井寺勢 *	三井寺を出る以仁王
	宇治橋から落下する平家軍		三井寺を出る以仁王 *	
	矢切り但馬の奮戦	矢切り但馬か淨妙坊の奮戦 *	宇治橋から落下する平家軍	
	長刀を振るう淨妙坊			
	淨妙坊の肩を一来法師が超える2		一人橋の上で戦う淨妙坊	淨妙坊の肩を一来法師が超える
	忠綱一党が馬筏となり川を渡る2	忠綱一党が馬筏となり川を渡る *		忠綱一党が馬筏となり川を渡る
宮御最期	平等院に討ち入る軍勢 3		忠綱一党が馬筏となり川を渡る	
	平等院で戦う源氏軍と平家軍 4			
	切腹する頼政 4		平等院で戦う源氏軍と平家軍	切腹する頼政
	景家の軍勢に討たれる以仁王	景家の軍勢に討たれる以仁王	景家の軍勢に討たれる以仁王 *	景家の軍勢に討たれる以仁王
	宮を迎えて来た興福寺勢 3			
若宮御出家	凱旋する平家の軍勢 2	以仁王の首実験をさせられる女 *		
	若宮の不在を報告する頼盛 2			
	別離を悲しむ女院たちと若宮 3	出家させられる若宮 *	別離を悲しむ女院たちと若宮	別離を悲しむ女院たちと若宮
	出家させられる若宮 2			
鷦	天皇のおびえに詮議する公卿たち			
	怪物に弓をつがえる頼政 2	怪物に弓をつがえる頼政 *	怪物に弓をつがえる頼政 *	怪物に弓をつがえる頼政
	御剣を賜り歌を詠む頼政	御剣を賜り歌を詠む頼政 *		
	弓をつがえる頼政 2			
三井寺炎上	攻める平家勢と応戦する三井寺勢	炎上する三井寺	戦う三井寺勢と炎上する三井寺 *	戦う三井寺勢と炎上する三井寺

巻五 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
都遷	内裏を出発する福原行幸の行列	福原行幸の行列	内裏を出発する福原行幸の行列	内裏を出発する福原行幸の行列
	頼盛邸の安徳天皇			
	船で福原に引つ越す人々 2			
新都	新都造営の測量をする人々 2			新都造営の測量をする人々
			清盛が那綱に内裏造営をさせる*	
月見	月見に船を出す公卿達	月見に船を出す公卿達 *	大宮御所を訪ねる実定 *	大宮御所を訪ねる実定
	大宮御所を訪ねる実定			
	大宮と対面する実定	大宮と対面する実定 *		
	歌を詠み交わす戚人と小侍従 2			
物怪	清盛の寝所に現れた巨大な顔 2			清盛が怪夢を語る*
	清盛の見た大觸體・馬尾の鼠 3	馬の尾に鼠が巣を作る*	馬の尾に鼠が巣を作る*	清盛の前に現れた大觸體
	雅頼の若侍の夢見を聞く	清盛と若侍 *		
大庭早馬	夢見の話を解釈する成頼			
	早馬で頼朝挙兵の知らせが届く2	頼朝挙兵の知らせが届く*	頼朝挙兵の知らせが届く*	頼朝挙兵の知らせが届く
	顔を合わせる侍達 *			
朝敵挙	頼朝挙兵の報に怒る清盛 2		頼朝挙兵の報に怒る清盛 *	頼朝挙兵の報に怒る清盛
咸陽宮	太子丹を放免する始皇帝 2		太子丹を放免する始皇帝 *	
	刑罰を大臣にする太子丹 3			
	荊軻に加担する樊於期 2			
	始皇帝を襲う荆軻 2	刀を持って駆け寄る兵達 *		
	花陽夫人の機転で逃げる始皇帝	花陽夫人の機転で逃げる始皇帝 *		花陽夫人の機転で逃げる始皇帝
文覚荒行	竹敷で苦行を試みる文覚 2			
	那智滝で苦行する文覚 2	社殿(那智社か) *	那智滝で苦行する文覚 *	那智滝で苦行する文覚
	苦行を強行する文覚 2	那智滝で苦行する文覚 *		
	荒行を成就する文覚			
勧進帳	管弦中に勧進帳を読上げる文覚	抵抗して暴れる文覚 *	管弦中に勧進帳を読上げる文覚 *	管弦中に勧進帳を読上げる文覚
文覚被流	抵抗して暴れる文覚	管弦の樂 *	抵抗して暴れる文覚	抵抗して暴れる文覚
	取り押さえられる文覚			
	引立てられる文覚 2			
	觀音への手紙を代筆させる文覚			
		流罪の船の文覚 *		流罪の船の文覚
	童神を叱る文覚 2	童神を叱る文覚 *	童神を叱る文覚 *	
伊豆院宣	頼朝に挙兵を勧める文覚	頼朝に挙兵を勧める文覚 *		
	福原に院宣をもらいに行く文覚 2			
	頼朝に院宣を渡す文覚 2	頼朝に院宣を渡す文覚 *	頼朝に院宣を渡す文覚 *	頼朝に院宣を渡す文覚
富士川	東国へ行進する平家の軍勢			東国へ行進する平家の軍勢
	女と別れの歌を詠み交わす忠度3		女と別れの歌を詠み交わす忠度 *	
	富士川に軍を敷く平家勢			
	怖気づく平家軍 3	怖気づく平家軍 *	怖気づく平家軍 *	
	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍(4)	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍 *	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍 *	水鳥の羽音に逃げ出す平家軍
	八幡大菩薩に感謝する頼朝			
五節之沙汰	敗戦の詮議をする平家の人々 2	敗戦の詮議をする平家の人々 *	敗戦の詮議をする平家の人々	敗戦の詮議をする平家の人々
	福原の新内裏に入る安徳天皇	福原の新内裏の安徳天皇か *		
都還	京都へ還る人々 3			京都へ還る安徳天皇の一一行
	近江へ進軍する平家勢	近江進軍を命じる清盛か *		
	奈良炎上	近江へ進軍する平家勢 *		
	奈良から逃げ帰る忠成 2			
	首を晒される兼康の兵達			
	奈良へ進軍し戦う平家軍 2	興福寺衆徒と戦う平家軍 *	奈良へ進軍する平家軍 *	興福寺衆徒と戦う平家軍
	炎上する東大寺大仏殿	炎上する東大寺大仏殿か *	戦う平家軍と炎上する民家	炎上する東大寺大仏殿
	清盛に戦果を報告する重衡 2			

巻六 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
新院崩御	静まり返る清涼殿と参内した成宝	御簾の降りた室内 *	経を読む僧侶達 *	
	高倉上皇崩御を悲しむ女房達 4		紅葉を楽しむ高倉上皇 *	
紅葉		紅葉を焚いてしまう下部たち *		紅葉を焚いてしまう下部たち
	葉を落とした紅葉を見る高倉天皇2	下部に事情を聞く *		
	荷を奪われた少女を助ける天皇3			
葵前	高倉天皇に進言する隆房	横たわる天皇に進言する隆房 *		
	奏前に文を送る天皇 2			葵前に手紙を送る天皇
小督	小督に文を送る隆房	天皇の文を見る葵前 *	天皇の文を見る葵前 *	
	仲国に小督を尋ねさせる天皇 2		仲国に小督を尋ねさせる天皇 *	仲国に小督を尋ねさせる天皇
	小督を探しあてる仲国 4	小督を探しあてる仲国 *	小督を探しあてる仲国 *	小督を探しあてる仲国
	小督の返事を預かる仲国 2	小督の返事を預かる仲国 *		
	返事を読む高倉天皇			
	内裏へ向かう小督		内裏へ戻った小督 *	
	剃髪させられる小督 2			
	高倉上皇の崩御を嘆く後白河上皇			
廻文	清盛が厳島の姫君を法皇に送る			
	平家追討を企てる木曾義仲 2		平家追討を企てる木曾義仲 *	平家追討を企てる木曾義仲
飛脚到来	義仲蜂起の知らせが清盛に届く	協議する侍達 *		義仲蜂起の知らせが清盛に届く
	兵乱鎮圧の祈願が行われる 2			
	義基邸を攻める平家軍 2	出陣する兵士達 *	義基邸を攻める平家軍	
		館を襲う兵士達 *		
	西海の謀反の知らせを受ける清盛	門前で戦う兵達と室内の男女 *	西寂を攻める河野通信 *	
入道逝去	源氏追討を命じる後白河法皇 2	病付く清盛 *	熱病に罹り水風呂に入る清盛 *	
	熱病に罹り水風呂に入る清盛 2			
	遺言を語る清盛 2			遺言を語る清盛
	悶死する清盛と弔問の人々 2	板の間で水を浴びる清盛 *	清盛の死に弔問する人々	
経島	葬送の夜の変事と捕まつた人々 3	葬送の夜に騒ぐ人々 *		捕まつて事情を聞かれる人々
		捕まつて事情を聞かれる人々 *		
	経島の造営工事			
慈心房	閻魔王の宣旨を読む尊恵			
	閻魔王宮への迎えの車と尊恵			
	閻魔王宮の尊恵	閻魔王宮の尊恵 *	閻魔王宮の尊恵	
		尊恵を迎える菩薩達 *		
	清盛にこの夢を語る尊恵 2			清盛にこの夢を語る尊恵
祇園女御	白河法皇の前に異形の者が出現			
	異形の油坊主を捕える忠盛	異形の油坊主を捕える忠盛 *	異形の油坊主を捕える忠盛	異形の油坊主を捕える忠盛
	法皇と歌を詠み交わす忠盛	法皇と歌を詠み交わす忠盛か *		
洲股合戦	法住寺殿へ渡御を勧める宗盛 2			
	大仏殿の起工式を行なう行隆			
	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛 2	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛	源氏と尾張川を挟んで戦う知盛
	矢作川の陣で平家を迎える源氏			
嘎声	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長3	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長	黒雲に覆われ落馬し死ぬ助長
	助長頓死の知らせを聞く平家 2			
	配流より戻り楽を披露する師長ら			
横田河原合戦	内裏で大仁王会が行われる 4			
	日吉社における法華經転読供養			
	内裏を固める平家軍 3			内裏を固める平家軍
	還御する法皇と迎える重衡軍 4	日吉社に行幸する法皇 *		
	偽りの赤旗を揚げる義仲軍	横田河原で対峙する両軍		
	謀られて敗走する平家軍			謀られて敗走する平家軍
	宗盛の昇進に華やぐ六波羅			
	法住寺殿に行幸する安徳天皇			

巻七 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
北国下向		鎧姿の武者と対面する若武者 *	義仲と人質になる息子との別れ	義仲と人質になる息子との別れ
	人質の義仲の息子と対面する頼朝			
	義仲追討に北国へ下る平家軍 2	門前で旗を掲げる軍勢 *	民家から略奪する平家軍 *	義仲追討のため北国へ下る平家軍
	竹生島へ船を出させる経正			
竹生島詣	弁財天社の前で琵琶を弾く経正 2	弁財天社の前で琵琶を弾く経正	弁財天社の前で琵琶を弾く経正 *	弁財天社の前で琵琶を弾く経正
火打合戦		城内の義仲勢 *		
	火打城を攻めあぐねる平家軍 2	火打城を攻めあぐねる平家軍 *	火打城を攻めあぐねる平家軍	火打城を攻めあぐねる平家軍
	鏑矢で攻略法を教える斎明 3			
	水を落として攻め込む平家軍 3			
	篠原で対峙する源平両軍 2			
木曾願書	覚明に願書を書かせる義仲 2	覚明に願書を書かせる義仲	覚明に願書を書かせる義仲 *	覚明に願書を書かせる義仲
	八幡社に勝利を祈願する義仲			
俱利伽羅落	対峙したまま日暮れを待つ義仲軍			対峙したまま日暮れを待つ義仲軍
	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす 2	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす	平家を俱利伽羅谷へ追い落とす
	首を切られる斎明 3			
	氷見の湊を馬で攻め込む義仲軍 3			
篠原合戦	仲間達と覚悟をしあう斎藤実盛 2			仲間達と覚悟をしあう斎藤実盛
	畠山勢と今井勢の決戦			
	助けた行重に討たれる長綱 2	助けた行重に討たれる長綱	助けた行重に討たれる長綱 *	行重を助けてやった長綱
	立つまま討死する有国			
実盛最期	手塚主従に討たれる実盛・首実検 2	手塚主従に討たれる実盛	実盛の首実検をする義仲 *	手塚主従に討たれる実盛
				実盛の首実検をする義仲
玄昉	戦死者を弔う都の人々 2	戦死者を弔う都の人々 *		
	玄昉の首を持ち去る広嗣の亡靈			
	興福寺に降った玄昉の髑髏	興福寺に降った玄昉の髑髏 *	興福寺に降った玄昉の髑髏 *	
木曾山門牒状	義仲は山門への牒状を書かせる	門前の武士達 * (聖主臨幸①か)	義仲は山門への牒状を書かせる *	義仲は山門への牒状を書かせる
		鎧武者達と三人 * (聖主臨幸①か)		
山門返牒	山門は義仲に加担の返牒をする	読経する僧達と書状を囮む僧俗達	山門は義仲に加担の返牒をする *	山門は義仲に加担の返牒をする
	山門の返牒を誇る義仲			
平家山門連署	平家も山門に連署で願書を出す			平家から願書を受け取る明雲
	日吉社に平家の願書を出す明雲		平家の願書を読む山門の僧俗達 *	
主上都落	源氏に怯え荷造りする平家の人々			
	義仲を迎えて集まる平家			
	建礼門院に都落ちを進言する宗盛			建礼門院に都落ちを進言する宗盛
	後白河法皇の行方を捜す宗盛 2			
	出発する安徳天皇 2		出発する安徳天皇	
	都落ちの列から抜ける藤原基通			出発する天皇と列から抜ける基通
維盛都落	家族に縋られ出発しかねる維盛 2	家族に縋られ出発しかねる維盛 *		
	遅れた維盛に催促する平氏	遅れた維盛に催促する平氏 *	遅れた維盛に催促する平氏	遅れた維盛に催促する平氏
	維盛に追いつがる斎藤兄弟			
	平家に焼き払われる京の家々			
聖主臨幸	関東武者の命乞いをする知盛 2	書状の作成 * (木曾山門牒状①か)	関東武者の命乞いをする知盛 *	
		協議する僧 * (山門返牒状①か)		
忠度都落	藤原俊成に和歌を差し出す忠度 2	藤原俊成に和歌を差し出す忠度	藤原俊成に和歌を差し出す忠度 *	藤原俊成に和歌を差し出す忠度
経正都落	経正は法親王に琵琶を返す	経正は法親王に琵琶を返す	経正は法親王に琵琶を返す *	経正は法親王に琵琶を返す
	経正を見送る法親王 2			
青山之沙汰	宇佐八幡で名器青山を弾く経正			
	村上天皇に秘曲を授ける廉承武	村上天皇に秘曲を授ける廉承武 *	村上天皇に秘曲を授ける廉承武 *	
		居並ぶ公卿たち *		
一門都落		都落ちする一門 *	都落ちする一門	
	一行から途中で引き返す頼盛 2			一行から途中で引き返す頼盛
	常盤殿に命乞いする頼盛			
	平家の一行に追いつく維盛兄弟	平家の一行に追いつく維盛兄弟か *		
	宗盛に進言する貞能	宗盛に進言する貞能か		
	重盛の墓前で嘆く貞能 2		重盛の墓前で嘆く貞能 *	
福原落	宗盛に忠誠を誓う平家の人々			
	福原の御所を見て回る人々			
	福原に火を放ち船を出す平家一門	福原に火を放ち船を出す平家一門	福原から船を出す平家一門	福原に火を放ち船を出す平家一門

巻八 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
山門御幸	後白河法皇は比叡山に遁れる3 比叡山に詰めかけた貴族達			
	守護する源氏の一団 *			
	比叡山から還御する後白河法皇 *	比叡山から還御する後白河法皇 *	比叡山から還御する後白河法皇	
	戻って義仲らに院宣を下す法皇			院宣を受ける義仲と行家
	法皇に懐く第四皇子 2		法皇に懐く第四皇子 *	法皇に懐く第四皇子
	範光の叙位を沙汰する後鳥羽天皇			
名虎	安楽寺に参集し歌を詠む平家 2			
	皇位継承の競馬を見守る公卿達		皇位継承の競馬を見守る公卿達	皇位継承の競馬を見守る公卿達
	皇位継承の相撲の能雄と名虎	皇位継承の相撲の能雄と名虎	皇位継承の相撲の能雄と名虎	皇位継承の相撲の能雄と名虎
	惠亮の祈りによって勝利する能雄 2			
宇佐行幸	第四皇子の即位を聞く平家一門			
	筑紫の仮御所 2			
	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門
	名月に都をしのぶ平家一門 2		大宰府に戻った安徳天皇 *	
緒環	平家追い出しを下知される維義			
	維義の祖先の女と相手の男 3			
	正体を現す大蛇と維義の祖先の女	正体を現す大蛇と維義の祖先の女		正体を現す大蛇と維義の祖先の女
	女と大蛇の間に生まれた轍太太			
大宰府落	説得に来た資盛を追い返す維義			
	使者維村に説き聞かせる時忠			
	維義方を攻める平家勢			
	雨中、大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門	雨中、大宰府を落ち行く平家一門
	平家を迎える公藤次秀遠			
	流離う平家の船から入水する清経			流離う平家の船から入水する清経
	屋島沖で暮らす平家一門 2			
征夷將軍院宣	院宣を受け取る三浦義澄		院宣を受け取る三浦義澄	院宣を受け取る三浦義澄
	引き出物を受け取る康定 2			
	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝	康定に対面する頼朝
	引き出物を受け取る康定 2			
猫間	法皇に報告する康定			
	義仲に食事を出される猫間中納言	義仲と猫間中納言 *		義仲に食事を出される猫間中納言
	義仲の牛車と追う兼平	牛車と騎馬の一一行 *		義仲の牛車と追う兼平
	牛車の後ろから降りる義仲			
水島合戦	船を出す平家追討軍と平家の使者			
	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦
瀬尾最期	瀬尾兼康が謀で倉光三郎を殺す2			瀬尾兼康が謀で倉光三郎を殺す
	館で老兵を集めると瀬尾兼康			
	瀬尾追討に進軍する今井兼平?			
	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平 *	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平	城中の瀬尾勢を攻める今井兼平
	退却する瀬尾勢を追う今井勢 2	退却する瀬尾勢を追う今井勢 *		
	倉光次郎を水中で仕留める瀬尾2			倉光次郎を水中で仕留める瀬尾
	息子小太郎を案する瀬尾兼康3			
	奮戦する瀬尾兼康親子と郎党 3		奮戦する瀬尾兼康 *	奮戦する瀬尾兼康親子と郎党
室山合戦	進軍する義仲勢と遁れる行家勢2			
	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍
	船で河内長野に逃れる行家主従			
鼓判官	使者の鼓判官を侮る義仲 3			使者の鼓判官を侮る義仲
	義仲追討を進言する知康 3			
	義仲に降参を進言する今井兼平	義仲に降参を進言する今井兼平 *		
法住寺合戦	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍2	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍	法住寺の知康と攻寄せる義仲軍
	法住寺炎上と攻めかける義仲軍3			
	法皇方の敗走と奥で遁れる法皇4			法住寺炎上と奥で遁れる法皇
	裸の頼輔。船上の後鳥羽天皇4			船上の後鳥羽天皇
	奮戦する仲兼勢 4			
	落ちのびる仲兼主従 4		仲兼が討たれたと思い泣く仲頼 *	
	六条河原の首と勝鬨を擧げる義仲			
	法皇に明雲らの死を伝える脩範2			
	思い上がる義仲を諫める覚明	思い上がる義仲を諫める覚明 *	思い上がる義仲を諫める覚明 *	思い上がる義仲を諫める覚明
	黙田に留まる範頼・義経軍2			
	知康を非難する頼朝 2	知康を非難する頼朝か *		
	義仲の申出を協議する平家一門			
	師家を攝政につける義仲 2			

巻九 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
小朝挙	屋島で新年を迎える平家一門	正月を迎えた仮御所か	正月を迎えた仮御所か *	
宇治川	景季に磨墨を与える頼朝 生食を下賜される高綱 2 生食に気つく景季 景季に言いつくろう高綱 景季と高綱の宇治川の先陣争い 先陣の名乗りを上げる高綱・重親2 敗走する木曾軍 2	生食を下賜される高綱 生食に気つく景季 景季に言いつくろう高綱 * 景季と高綱の宇治川の先陣争い * 先陣の名乗りを上げる高綱・重親2 御所に参上する義経 *	生食を下賜される高綱 生食に気つく景季 景季に言いつくろう高綱 * 景季と高綱の宇治川の先陣争い 景季と高綱の宇治川の先陣争い 徒步の先陣となる重親	生食を下賜される高綱 生食に気つく景季
河原合戦	戦陣日記に目を通す頼朝 出立に女と別れを惜しむ義仲2 義仲軍と戦う東国勢 2	法皇と公卿たち *	出立に女と別れを惜しむ義仲 *	出立に女と別れを惜しむ義仲
木曾最期	今井兼平と再会する義仲 2 東国軍に追われる義仲勢 別れ際に師重の首を捺じ切る巴 2 義仲に自書を勧める兼平 2 泥田で討ち取られる義仲 2 壯絶な自書をする兼平	東国軍と奮戦する義仲勢 * 別れ際に師重の首を捺じ切る巴 * 泥田で討ち取られる義仲 * 泥田で討ち取られる義仲 *	東国軍と奮戦する義仲勢 別れ際に師重の首を捺じ切る巴 泥田で討ち取られる義仲 壯絶な自書をする兼平	東国軍と奮戦する義仲勢 別れ際に師重の首を捺じ切る巴 泥田で討ち取られる義仲 壯絶な自書をする兼平
樋口被斬	義仲と兼平の死を聞く兼光 2 名乗り挙げて戦い討れたる光広2 降伏を勧められる樋口兼光3 引き回される義仲の首と兼光	残党を集めて戦う兼光 *	残党を集めて戦う兼光	残党を集めて戦う兼光
六箇度合戦	一の谷に布陣した平家軍 四国の兵船を追い払う教経勢 福良に攻め寄せた教経勢 2	二騎になるまで戦って逃げる通信 5	二騎になるまで戦って逃げる通信 *	二騎になるまで戦って逃げる通信 忠景勢に攻めかかる教経勢
三草勢揃	忠景勢に攻めかかる教経勢 2 安摩・園部の兵を討ち取られる教経2 通信ら源氏勢を追い散らす教経2 院の御所に参上した範頼と義経	安摩・園部の兵を討ち取る教経	通信ら源氏勢を追い散らす教経	
三草合戦	清盛の忌日に仏事を當む平家一門 福原で除目の沙汰をする宗盛 妻子を思い泣く経盛 2 西へ進軍する範頼軍 2 小野原に布陣する義経軍	西へ進軍する範頼軍と義経軍	西へ進軍する義経軍 *	西へ進軍する範頼軍と義経軍 民家を焼き夜討ちに進む義経軍
老馬	平家陣になだれ込む源氏軍 船で屋島へ渡る資盛たち 2	夜討で平家陣になだれ込む源氏軍	夜討で平家陣になだれ込む源氏軍	
老馬	出陣を応諾する教経 2 敵襲に備える教経勢 2 老馬を案内に山道を行く義経軍2 獵師に道案内を命じる義経	平家軍の陣 *	敵襲に備える教経勢 *	老馬を案内に山道を行く義経軍 獵師に道案内を命じる義経
一二之駆	平山季重の様子を聞く熊谷直実2			
二度之駆	平家の木戸で熊谷に追いつく季重 奮戦する熊谷父子と季重 徒步で戦う熊谷父子 3 替馬で奮戦する熊谷父子	奮戦する熊谷父子と季重 奮戦する熊谷父子と季重 敵陣へ単騎攻め込む季重 *	奮戦する熊谷父子と季重 奮戦する熊谷父子と季重 敵陣へ突入する河原兄弟 *	平家の木戸で名乗る熊谷父子 平家の木戸で熊谷に追いつく季重 徒步で戦う熊谷父子 平家の木戸を攻める源氏勢
坂落	崖を背にに戦う梶原父子 2 入り乱れて戦う両軍 鵜越を落ちた鹿を射る平家軍2 馬を落としてみる義経 炎上する陣と船へ逃れる平家軍	崖を背にに戦う梶原父子 *	崖を背にに戦う梶原父子 鵜越を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義経 炎上する陣と船へ逃れる平家軍	崖を背にに戦う梶原父子 鵜越を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義経 炎上する陣と船へ逃れる平家軍
盛俊最期	知盛に一の谷の敗戦を伝える2 則綱を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則綱 忠度最期	則綱を助け休息する盛俊 *	則綱を取る則綱 *	則綱を助け休息する盛俊
重衛生捕	腕を切られ討たれる忠度 忠度の残した歌を読む六弥太 馬を射られた重衡 2	腕を切られ討たれる忠度 * 忠度の残した歌を読む六弥太 * 馬を射られた重衡 *	腕を切られ討たれる忠度 * 忠度の残した歌を読む六弥太 * 馬を射られた重衡	腕を切られ討たれる忠度 馬を射られた重衡
敦盛最期	若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2	若武者を呼び返す熊谷直実 * 若武者の首を取る直実 *	若武者を呼び返す熊谷直実 * 若武者の首を取る直実 *	若武者を呼び返す熊谷直実
浜戦	討死に死する平家の武者達 2 父を助けて討死する知章 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	父を助けて討死する知章 *	父を助けて討死する知章	父を助けて討死する知章
落足	沈む船から引き上げられる師盛 源氏勢に討たれる通勢 2	沈む船から引き上げられる師盛 *	沈む船から引き上げられる師盛	沈む船から引き上げられる師盛
小宰相	海上をさしらう平家一門の船 通勢の死を聞き泣く小宰相 入水する小宰相	海上をさしらう平家一門の船 通勢の死を聞き泣く小宰相 *	海上をさしらう平家一門の船 通勢の死を聞き泣く小宰相	海上をさしらう平家一門の船 通勢の死を聞き泣く小宰相
	小宰相の死体を引き上げる平家 小宰相を水葬にする平家の人々 小宰相と通勢の恋文の話 2	小宰相の死体を引き上げる驚く平家 *	入水する小宰相 *	入水する小宰相

巻十 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
首渡	維盛の身を案じる北の方			
			首を都大路を渡すよう求める源氏 *	首を都大路を渡すよう求める源氏
	都大路を渡される平家軍の首	引き回される牛車(内裏女房①か)		
	維盛の病気を伝える斎藤兄弟	維盛の手紙を読む妻子 *		維盛の手紙を読む妻子
	返事を書く維盛の妻子 2			
	妻子の手紙に涙を流す維盛	妻子の手紙を受取る維盛 *		
内裏女房	都大路を引き回される重衡		都大路を引き回される重衡	都大路を引き回される重衡
	重衡に院宣を伝える定長			
	屋島への使者に伝言する重衡			
	申出て重衡の話相手をする知時2			申出て重衡の話相手をする知時
	重衡の手紙を読む内裏女房 2		重衡の手紙を読む内裏女房 *	
	女房との対面の許しを乞う知時			
	牛車と門外で待つ武士達 *			
	訪れた女房と語り合う重衡 2	訪れた女房と語り合う重衡 *		訪れた女房と語り合う重衡
	別れを惜しむ重衡と女房 2			
八島院宣	院宣に目を通す宗盛			
講文	重衡の助命を訴える二位の尼	重衡の助命を訴える二位の尼 *	重衡の助命を訴える二位の尼 *	重衡の助命を訴える二位の尼
	重衡への手紙を書く二位の尼 2	文に目を通す男 *		
戒文	請文を読む後白河法皇			
	法然との対面を願う重衡			
	法然に後生の救いを求める重衡	法然に後生の救いを求める重衡 *	法然に後生の救いを求める重衡 *	法然に後生の救いを求める重衡
	法然に受戒の礼を贈る重衡 2			
海道下	鎌倉へと護送される重衡 2	護送の輿 *	鎌倉へと護送される重衡 *	
	重衡と歌を取り交わす熊野の娘	護送の輿と街道の女達		
	街道を下る重衡一行			街道を下る重衡一行
千手前	重衡に対面する頼朝	重衡に対面する頼朝 *	重衡に対面する頼朝	重衡に対面する頼朝
	女房の世話で身を清める重衡			女房の世話で身を清める重衡
	女房の名を尋ねる重衡 2			
	千手前と朗詠に興じる重衡	千手前と朗詠に興じる重衡 *	千手前と朗詠に興じる重衡	千手前と朗詠に興じる重衡
	千手前をねぎらう頼朝			
横笛	屋島を抜け出す維盛たち 2			
	横笛を追い返させる滝口入道 2	横笛を追い返させる滝口入道 *	横笛を追い返させる滝口入道 *	横笛を追い返させる滝口入道
	高野山へ向かう滝口入道 2			
	滝口入道へ返歌をしたためる横笛			
	滝口入道と合掌する人々 *			
	滝口入道と対面する維盛			
高野	滝口入道に苦衷を訴える維盛			
	高野山内を巡拝する維盛一行		高野山内を巡拝する維盛一行 *	高野山内を巡拝する維盛一行
維盛出家	滝口入道の修行を見守る維盛			
	出家する維盛主従		出家する維盛主従 *	出家する維盛主従
	武里に屋島への報告を命じる維盛			
	武士の一団とすれ違う維盛一行		維盛一行に畏まる武士の一団 *	
熊野参詣	熊野本宮に参籠する維盛一行			
	那智滝の維盛一行と噂する僧侶達	那智滝の維盛一行 *	那智社の維盛一行と噂する僧侶 *	那智滝の維盛一行と噂する僧侶達
維盛入水	島の松に名を書き付ける維盛			島の松に名を書き付ける維盛
	入水のため沖に漕出す維盛一行 *			
	入水する維盛	入水する維盛 *		
三日平氏	帰途につく滝口入道と武里 2	御輿と武士たち(大嘗会沙汰①か)		
	武里の報告を聞く屋島の平家一門 2	奥の院の維盛一行 *(高野②か)		武里の報告を聞く屋島の平家一門
	崇徳上皇の靈を鎮める神社建立	奥の院参拝の一団 *(高野②か)		
	頼盛の鎌倉下向の件を断る宗清			
	宗清の不参を残念がる頼朝	頼朝邸門前 *		
	頼朝は頼盛へ引出物を贈る	頼朝は頼盛へ引出物を贈る *	頼朝は頼盛へ引出物を贈る	頼朝は頼盛へ引出物を贈る
	源氏と戦い敗れる伊賀・伊勢の兵			
藤戸	維盛の入水を聞く妻子たち		維盛の入水を聞く妻子たち *	維盛の入水を聞く妻子たち
	平家の行末を案じる女たち			
	後鳥羽天皇の即位礼			
	月夜に都を恋い歌を詠む行盛			
	海を渡れぬ源氏を挑発する平家軍	海を渡れぬ源氏を挑発する平家軍		海を渡れぬ源氏を挑発する平家軍
	眠る源氏軍 *			
	漁夫から浅瀬を聞き出す盛綱 2	漁夫から浅瀬を聞き出す盛綱 *	漁夫から浅瀬を聞き出す盛綱 *	漁夫から浅瀬を聞き出す盛綱
	海に馬を乗り入れる盛綱			海に馬を乗り入れる盛綱
	馬で押し渡って戦う源氏と平家軍		馬で押し渡って戦う源氏と平家軍	
	屋島へ退却する平家軍 2			
大嘗会之沙汰	御禊行幸の行列 2	文を読む公卿と尼君 *(藤戸②か)		
	遊び呆ける節類たち	屋内の公卿たち *(藤戸④か)		

巻十一 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
逆櫓	平家追討の院宣を受ける義経 2			平家追討の院宣を受ける義経
	行末を嘆く平家一門			
	梶原景時と争論する義経	梶原景時と争論する義経 *	梶原景時と争論する義経 *	梶原景時と争論する義経
	強風に船出させる義経軍	強風に船出させる義経軍 *	強風に船出させる義経軍	強風に船出させる義経軍
	篝火で先導する義経の船			
勝浦合戦	上陸する義経軍			
	親家を引見する義経			親家を引見する義経
	能遠の城を攻める義経勢 2	能遠の城を攻める義経勢	能遠の城を攻める義経勢	
	勝利を喜ぶ義経勢			
大坂越	屋島へと急ぐ義経軍 2			平家への使者を捕える義経勢
	平家の使者を捕える義経勢			
	屋島を急襲する義経軍 4	屋島を急襲する義経軍	屋島を急襲する義経軍	
	次々に名乗りを挙げる義経軍			次々に名乗りを挙げる義経軍
嗣信最期	舌戦の末に射られる盛嗣 2		舌戦の末に射られる盛嗣 *	
	教経に射落される嗣信 2	教経に射落される嗣信 *	教経に射落される嗣信	教経に射落される嗣信
	嗣信の死に泣く義経			
	嗣信の菩提を弔わせる義経	嗣信の菩提を弔わせる義経 *		
那須与一	那須与一に扇を射るよう命じる義経			
	扇を射る那須与一	扇を射る那須与一	扇を射る那須与一	扇を射る那須与一
弓流	平家の武者を射倒す与一			
	上陸して攻める景清たち平家勢			
	美尾屋十郎の鎧をちぎった景清		美尾屋十郎の鎧をちぎる景清 *	美尾屋十郎の鎧をちぎった景清
	弓を拾う義経をめぐり戦う両軍	弓を拾う義経をめぐり戦う両軍	弓を拾う義経をめぐり戦う両軍	弓を拾う義経をめぐり戦う両軍
	眠る源氏軍と敵を見張る義経			
志度合戦	志度浦に漕ぎ寄かける平家軍 2			
	教能に平家が負けたと謀る義盛 2	教能に平家が負けたと謀る義盛 *	教能に平家が負けたと謀る義盛 *	教能に平家が負けたと謀る義盛
	教能に降伏を勧める義盛 2	降伏した教能を連れ帰る義盛 *		
	遅れて屋島に到着した梶原勢			
	法皇に瑞兆を報告する神主			
壇浦合戦	範頼軍に合流する義経軍			
	闘鷂で進退を占う別当湛増	闘鷂で進退を占う別当湛増 *	闘鷂で進退を占う別当湛増 *	
	源氏軍に漕ぎ寄せる湛増軍			
	義経と景時の同士討を止める源氏	義経と景時の同士討を止める *		義経と景時の同士討を止める源氏
遠矢	巧みに戦う梶原景時勢			
	平家軍に下知する知盛	陸地で向い合い弓を射る軍(?)		
	重能に問いただす宗盛			
	いっせいに矢を射かける平家軍	船上で矢を射かける軍勢 *		
	平家に矢を射返すよう招く義盛	入り乱れて戦う両軍 *		
	義盛の矢を射返す親清			
	仁井紀四郎を射返す浅利与一 3			仁井紀四郎を射返す浅利与一
	源氏軍に舞い降りる白旗		源氏軍に舞い降りる白旗	
先帝御入水	海豚の大群の吉凶を占う平家軍 2			
	女房達に敗戦を告げる知盛			
	帝とともに入水する二位の尼	帝とともに入水する二位の尼 *	帝とともに入水する二位の尼 *	
能登殿最期	海から引上げられる建礼門院	内侍所の唐櫃を開けかける源氏軍	内侍所の唐櫃を開けかける源氏 *	引上げられる建礼門院と泳ぐ宗盛父
	内侍所の唐櫃を開けかける源氏軍			
	引き上げられる宗盛父子 2			引き上げられる宗盛父子
	乳母子の景経の最期を見る宗盛			
	教経に追われて跳んで逃げる義経	教経に追われ跳んで逃げる義経 *		
	実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水する教経 *	実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水する教経
内侍所都入	平家軍と散らばる赤旗		平家軍と散らばる赤旗	
	平家の滅亡を奏する広嗣	剃髪する三人(維盛出家②) *		
	京に護送される平家の男女 2	修行者と侍達(維盛出家④) *		
	神器を迎えて鳥羽に向かう人々	僧達と通行人(熊野参詣①) *		
	社殿を挂む修行者達(熊野参詣①)	社殿を挂む修行者達(熊野参詣①)	都に戻された神器 *	
一門大路被渡	二宮奉迎の牛車を見送る女院			
	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち
	眼る清宗に着物を掛ける宗盛			
平大納言文之沙汰	文箱の処遇を時忠に相談する時忠	文箱の処遇を時忠に尋ねる時忠 *		
	文箱を時忠の娘に返す義経 2	文箱を時忠の娘に返す義経 *		文箱を時忠の娘に返す義経
	義経の所業に激怒する頼朝			
副将被斬	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛 *	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛
	副将を見送る宗盛父子			
	副将に斬りかかる兵士達 2			
	副将の首を斬る兵士達 2	副将の首を斬る兵士達 *	副将の首を斬る兵士達 *	副将の首を斬る兵士達
	副将の首を抱いて入水した女房達			
腰越	鎌倉へ護送される宗盛父子と義経			鎌倉へ護送される宗盛父子と義経
	頼朝に譲言する景時と集まる兵士	頼朝に譲言する景時 *		
	金洗沢の関から追い返される義経			
	申し開きの状を書かせる義経	申し開きの状を書かせる義経 *	申し開きの状を書く義経 *	
大臣殿誅罰	頼朝の口上を畏まって承る宗盛	頼朝の口上を畏まって承る宗盛 *	頼朝との対面を待つ宗盛父子	頼朝の口上を畏まって承る宗盛
	都に護送される宗盛父子	宗盛に引導を渡す僧 *		
	首を討たれる宗盛	首を討たれる宗盛 *	首を討たれる宗盛父子 *	
	父の最期を尋ねる清宗			
	晒された宗盛父子の首			

巻十二 章段	林原美術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本(巻十二なし)
重衡被斬		奈良へ送られる重衡 *	奈良へ送られる重衡 *	
	北の方と対面する重衡		北の方と対面する重衡 *	
	髪を形見に北の方に渡す重衡			
	北の方と別れる重衡			
	奈良の大衆に引渡される重衡 2			
	斬首される重衡	斬首される重衡 *	斬首される重衡 *	
	過ぎ悲しむ尼僧達(長谷六代④か)			
大地震	大地震に逃げまどう人々	大地震に逃げまどう人々 *		
	御所へ還御する法皇の一一行 4	御所へ還御する法皇の一一行 *	御所へ還御する法皇の一一行	
紺搔沙汰	義朝の髑髏を捧げ鎌倉下向の文覚			
	義朝の髑髏を受け取る頼朝 2	義朝の髑髏を受け取る頼朝		
	義朝の墓に贈官を告げる勅使			
平大納言被流	建礼門院に別れを告げる時忠			
	妻子と名残を惜しむ時忠	妻子と名残を惜しむ時忠	妻子と名残を惜しむ時忠	
	配所へ護送される時忠			
土佐房被斬	義経討取を下知する頼朝			
	義経に起請文を書く土佐房	義経に起請文を書く土佐房 *		
	義経の夜襲をかける土佐房 2			
	土佐房勢を討破る義経主従	土佐房勢を討破る義経主従 *		
	義経の前に引出された土佐房 2		義経の前に引出された土佐房 *	
判官部落	範頼に義経追討を命じる頼朝			
	緒方三郎に助勢を頼む義経 2			
	九州に下向する義経勢 3	義経勢に攻めかかる太田勢 *	九州に下向する義経勢	
	義経勢に攻めかかる太田勢 2	九州に下向する義経勢 *		
	義経に置き去りにされた女房達1			
	義経追討の院宣を願出る北条時政			
吉田大納言沙汰	頼朝の申請を検討する法皇たち			
六代	次々に捕えられる平家の子孫達2			
	六代の隠れ家を見つけた時政勢2	六代の隠れ家を見つけた時政勢 *	六代の隠れ家を見つけた時政勢 *	
	僧坊の六代を取り囲む時政たち			
	六代を連行する時政の一一行 2	六代を連行する時政の一一行 *	六代を連行する時政の一一行	
	六代に返事を書く母君			
	文覚に六代の助命を頼む乳母	波打際の僧たち(六代被斬②) *	文覚に六代の助命を頼む乳母 *	
	泣く親子達(長谷六代③の錯簡か)	護送の奥(六代被斬③か) *		
	時政に六代の命乞いする文覚 2			
	六代の身を案じる母君たち	東海道を下る奥 *	六代の身を案じる母君たち *	
	斬首の場に引き出される六代 2	斬首の場に引き出される六代 *		
	斬首を止める使者の僧 2		斬首を止める使者の僧 *	
	頼朝の書状を誂む時政			
長谷六代	仔細を語る文覚 2			
	大覚寺にたどり着いた六代			
	泣く女房達(六代⑦との錯簡か)		戻った六代と再会する母君たち *	
	合掌する尼(重衡被斬⑥の錯簡か)			
六代被斬	島を見て泣く六代(六代被斬②か)			
	旅に出る六代2(六代被斬①か)			
	捕らわれた文覚			
		山を下る六代の奥(長谷六代①) *	鎌倉へ送られる六代 *	
	首を斬られる六代	六代と再会する母(長谷六代③) *		
女院御出家	東山の僧坊で泣く建礼門院			
	泣く僧と公卿達(小原御幸④か)	出家する女院 *	出家する女院 *	
	涙する尼姿の建礼門院	合掌する二人の尼 *		
	懐旧の歌をしたためる女院			
	女院を慰めに訪れる女性たち			
小原入御	小原の里に移る女院 2		念佛を唱える女院たち *	
	物音に人の訪れを思う女院			
小原御幸	小原に御幸する法皇	小原に御幸する法皇 *		
	寂光院の庭を眺める法皇 2			
	法皇と語り合う阿波の内侍		法皇と語り合う阿波の内侍 *	
	女院を待つ法皇(小原御幸⑤か)	女院を待つ法皇 *	女院を待つ法皇	
	女院と語る法皇(六道之沙汰①か)			
六道之沙汰	女院と語る法皇		女院と語る法皇 *	
女院御往生	法皇を送る女院 2	三人の尼 *		
	臨終を迎える女院	臨終の女院と阿弥陀の来迎 *	臨終の女院と阿弥陀の来迎 *	